第８回　（仮称）伊賀市観光振興ビジョン策定検討委員会　議事要旨

■ **日　時**：令和４年３月 15 日（火）10:00～12:15
■ **場　所**：伊賀市役所　会議室 202
■ **出席者**：※敬称略、OL：オンライン対応
〔 委 員 〕木根 英男（OL）、淺野 正嗣、山口 真由子、長島　祥行、柳生 厚義（OL）、
三橋 源一（OL）、榊 太基（OL）、西川 裕介（OL）、佐野 裕子（OL）、勝原 みどり
〔事務局〕観光戦略課 辻本 康文、猪口 陽平、イマイシス㈱ 多久和 敦志（OL）、
㈱キカクラボ 児島 永作（OL）、㈱テイコク 原田 梨沙
■ **議　事**：
１．開会
２．（仮称）伊賀市観光振興ビジョン　中間案について
・スケジュール説明
・修正及び追加内容の説明
３．日本版持続可能な観光ガイドライン（JSTS-D）について
・説明
４．大阪・関西万博（EXPO2025）について
・多久和氏からのプレゼンテーション
・意見交換
５．（仮称）Beyond2025 プロジェクトについて
・取組概要に関する意見交換
６．その他

５．（仮称）Beyond2025 プロジェクトについて
■取組概要に関する意見交換

三橋委員：大阪ビルメンテナンス協会が大阪万博に向けて、ＳＤＧｓとビルメンテナンスという内容で動き始めている。デジタルは電気が切れたら終わるため、これからの未来は「フェーズフリー」という言葉が必要である。
日常と非常時を分けずに暮らしていくことが今後必要となり、ＳＤＧｓの６番「安全な水とトイレを世界中に」は我々の業界に当てはまるため、安全な水とトイレを提供できるような清掃方法等の体制を構築するアピールをしていく方針である。
また、共創パートナーについて、大阪万博の開催期間は 10 月までであり、上野天神祭の開催期間と被ると思う。現在、伊賀市は京都と違って（だんじりの）曳き手が少ない。上野天神祭の歴史等を紹介し、実際に参加してもらうことで歴史

を継続する取り組みに繋がると思う。
また、自身も子ども向けに伝統的な田植え体験の提供を行っており、このようなことも歴史の継続に繋がる。米はパンと違って持続可能である。パンは何百年も続かないが、田んぼは 1,000 年以上続く。そういう形で伊賀ならではの取り組みを考えている。

淺野委員：自分が学生のときに「愛・地球博」が愛知県で開催され、何もなかった長久手市が、万博を機に建物を建設し、リニアを走らせるなど活気づいたが、万博終了後には全て廃墟の様になり、負の遺産が残っている状態。
オリンピック等、世の中の人々がどれだけ大きなイベントに関心があるのかというのが正直な感想で、大阪万博の開催地は伊賀からとても近い為、出展等様々なメリットがあると思うが、そこをゴールとしてしまうと、負の遺産をつくる可能性がある。
既に取り組みを行っており、万博後も継続して行う人なら良いが、万博に向けて何かを無理やり行うのは止めたほうがいい。
万博に来る人を伊賀市に来てもらうような仕組みづくりや、今までの伊賀と少し違うものを見せる等の取り組みが必要である。
例えば、「伊賀万博」のような伊賀市独自のイベントを開催し、大阪万博よりも優れた取り組みをＰＲできればと思う。
自分が土産屋であるため、沢山の人が来てくれるチャンスをいかにモノにできるかが重要である。万博という大きなイベントの流れに伊賀市がどのように乗るかを考える必要がある。

柳生委員：万博について、とってつけて何か起こすというより、伊賀市の観光インフラ等を整え、万博を訪れた海外の方に伊賀市へ観光に来てもらうような体制に予算を使っていく方が良いと思う。
また、今後の取組み方針について、ふわっとし過ぎていてここから具体的な問題や解決策等、ビジョンが思い浮かばない。13 ある問題点を、今後誰が、どのような組織が対応するのかを突き詰めなければ、５年後、10 年後も問題が残り続けるのではないかと感じる。会議に参加してこれで伊賀市が変わるのかといえば、そのような気がせずもやもやとして残る。

榊 委 員：ＥＸＰＯに関して、以前の技術力を見せる形から、参加する形に変わってきていること、今回のテーマは「いのち」であり、派手な一過性のものでなくＳＤＧｓなど、松尾芭蕉の「不易流行」や忍者の精神や暮らし等、あまり派手ではないが継続していく、伊賀市の本物が発信できると注目されやすいのではと思う。

ドバイの万博では、回転寿司のパビリオンに何時間も行列ができたという話を聞いた。ギャップもあるが、伊賀には芭蕉や忍者等の世界に発信できるコンテンツがあるため、チャンスがあれば出展し、伊賀の地域に暮らしている人たちが、世界に発信できるものがこれだけあると納得することで、熱量につながれば良いと思う。

西川委員：市のビジョンを何かしら大きなものと結びつけなければいけないという意味であれば、万博と結びつけなくて良いのではないか思う。
コロナ禍が 2025 年にどれだけ改善されているのかも見えづらいところがあり、万博ついでに大阪から伊賀まで行こうというマインドになるかは見えていないため、重要視する必要はないと考える。

佐野委員：観光ビジョンを具体的なアクションプランとして進めていく一つとして万博があると理解している。アクションプランを実現していくにあたり、万博の「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマが、「不易流行」や「伊賀市の魅力や観光を次の世代にも残し、市民の方々と一緒につくり上げる」という点では持続的な社会につながると思う。
しかし、現在のプランが永続的なもので、よりすばらしい伊賀市の観光を磨き上げていくためのものという点では、万博に出ることが主の目的になってしまうのであれば、万博に結びつけなくても良いと思う。

山口委員：「共創」は伊賀市民の理解が得られにくいのでは、と感じた。個人的には、「空飛ぶ車」が楽しみであり、「いのち」というテーマで行うことに非常に期待をしているが、「共創」と合っているのかと思う。
検討委員会の取り組みの方向性の中で、「地域での平穏無事な暮らしや日常の中から、伊賀市でしか体験できないような Well-Being を掘り起こす」というのは非常に共感している。中心市街地の新天地商店街の管理や地域ブログの運営等を行っているが、例えば通りに“かつお節”の自販機ができると伊賀市内外から様々な反応が生まれる。
小さなところからであるが、こういうことの積み重ねが観光に繋がると実感している。

勝原委員：万博の「いのち」というテーマや観光に、伊賀市のアクションプランが直接結びつくように感じないが、万博に関して関心が高まってきていると思う。
これを利用し市民の方々にアピールし、伊賀市一丸となって参加していくことに関しては、観光ビジョンを進めていく 10 年のスピード感はアップすると思う。

また、「周知する」ということについて、末端まで浸透させるのは難しいと感じる。良い取り組みを行っても、それが市民に伝わっていないこともある。
皆さんに知らせていくことや、伊賀市全員で取り組んでいく意識を持ってもらうようにするには、この万博は利用するのに良いツールだと思う。

木根委員：賛否両論がある中で、何らかの形で関わっていきたいと感じている。
今からどう持続可能な社会にしていくのかというのもあるが、これまで持続可能で来た、これからも続くというようなところにフォーカスした伊賀の国としての独自のあり方を、この機会に違った角度からアピールできるようなことがあればすごくいいなと感じている。
ＤＸ等の新しい取り組みより、既に存在している取り組みが今後も続くということをアピールする機会になれば良いと感じる。

児 島 氏：万博は、進めにくいことを一気に進め、整えるチャンスだと考えている。
アプリ等で伊賀市の観光のあらゆることをオールインワンにする話を、観光戦略課に提案している。㈱キカクラボで行っているオンラインセミナーで、インバウンドの第一人者の新津氏にセミナーをしていただき「2025 に向けて、国としてもインバウンドを元に戻していく」と聞いた。コロナ禍で、思考停止していた海外の人と伊賀をどう向き合わせていくかという部分が 2025 年までに再稼働していく。
例えばスマホ一つあれば、国内外問わず、伊賀の魅力を楽しむ人達が、あらゆる場所で買い物ができ、購入したものは通販で後から全部届く。思うような伊賀を一周するサイクルコースを万博に来た外国人旅行客が走ってみたいと来てくれたり。
体験型コンテンツもアプリで申し込める、宿の予約や決済、翻訳等旅マエから旅アトまですべてがアプリをダウンロードしていれば行える。また、伊賀に来ていない人でもバーチャルで楽しめる。
スマホの中のＤＸという部分は、万博を理由にできる。
開発するにあたっては、ユーザビリティも追求しなければならないが、完成すれば今後残っていくレガシーツールのひとつになる。
また、情報の更新はオープン化し、伊賀市内の事業者や運営している皆さんが登録情報を常に更新できる状態にできれば、いつでも新しいコンテンツが検索できる。
同じプラットホーム上に伊賀で頑張っている皆さんのやっていることが重なり、伊賀へ来た人が最適な形で受け取れて楽しめる。このような構想を仕上げる理由に万博がなると思うため、前向きに、より具体的な施策の話に入っていけたらと思う。

以　上